

氏名(本籍)	うお たに まさ ひろ 魚谷雅広(山口県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第4872号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	自己と他者—ハイデガー存在論における共同性—
主査	筑波大学教授 文学博士 笹澤 豊
副査	筑波大学名誉教授 博士(文学) 河上 正秀
副査	筑波大学教授 竹村 喜一郎
副査	筑波大学教授 博士(文学) 桑原 直己
副査	筑波大学講師 博士(文学) 千葉 建

論文の内容の要旨

本論文は、1920年代のM・ハイデガーの存在論を中心に、とくに現存在の日常性と本来性のそれぞれにおける相互共存在についての議論を通して、自己と他者およびその共同関係の諸相を解明しようとするものである。

上記テーマの解明のため、著者は、ハイデガーが『存在と時間』(1927年)において、人間すなわち現存在の存在は実存であると述べることに着目する。著者によれば、ここで提示される「実存(Existenz)」とは、「自分自身の存在において存在へと関わることを問題にすることができる」われわれ人間の存在を表現したものである。このように自分自身の存在へと関わることを、ハイデガーは「気遣い(Sorge)」という存在論的概念で示すが、ここには以下のような把握が含意されている。すなわち、われわれは「気遣い」として、自分自身へと関わるだけでなく、また物へと「配慮」し、さらに他者へと「顧慮」するかたちで世界と関わっているということである。人間の存在がこのような意味での「世界内存在」として把握される以上、ハイデガーの存在論においては、「他者とどのように関わって生きるか」が問題となると著者は言う。

この問題を考究するに当たっては、ハイデガーがわれわれの日常的な他者との在り方を「世人(das Man)」として規定することに着目しなければならない。「世人」においては、自己はむろんのこと、他者も自分自身を喪失しているとハイデガーは述べるが、彼はこの「世人」としての在り方から脱すること、すなわち「死へとかわる存在(Sein zum Tode)」として自分自身を取り戻すことを本来的な在り方であるとし、この「本来的自己」への変様で考察の主眼をおくことになる。ここで著者が問題として考察しようとするのは、そのような本来的自己同士の共同関係が、すなわち他者との本来的な相互存在が可能なのかどうか、また可能であるとすれば、それはどのようなものであるかということである。

ここで著者が着目するのは、ハイデガーにおいては現存在が本来的に自分自身であることとは、「配慮しつつ何かのもとに存在し、顧慮しつつ誰かと共に存在する者」として、みずから自分自身の存在へと企投することを意味していることである。このような在り方への変様は、現存在が改めてみずから「世界内存在」であることを自覚することであり、それによって、「世人」のうちで見失っていた物や他者への関係を理解

し直すことである。その意味で「本来的自己」は世界および他者へと開かれていると著者は言う。

しかし著者によれば、『存在と時間』では、「他者」がその本来的自己にどのように関わるのか、またその結果としてどのような相互共存在が構築されるのかが、必ずしも十分に論じられていないように見える。そのため、『存在と時間』刊行直後に、K. レーヴィットがハイデガーの他者論を批判したことをはじめとして、多くの批判が投げかけられてきた。とくにレーヴィットは、ハイデガーにおける共同存在の議論が不十分であると指摘し、また「顧慮」における「解放」概念についても、自己から他者への一方通行的関係であると批判して、彼独自の概念である相互的な「我-汝」の他者関係を、本来の相互共存在であるとして提示する。

また、ハイデガーが「死」の議論において、「最も固有な可能性」としての「死」は「没交渉的な可能性」であり、「死」が自己へと切迫することで他者との交渉は断絶されると論じていることもあって、彼の存在論に対しては、独我論的で他者が不在であるという批判がなされてきた。

本論文はこうした批判を踏まえながら、ハイデガーの「気遣い」、とりわけ他者への「顧慮」という概念の解明をめざすが、著者はその理由を、現代において「自分自身の存在とは何か」が改めて問われるべき問題として提起されているからであるとする。また本論文で著者が、ハイデガーの、とりわけ1920年代の著書および諸講義を中心に扱うのは、その時期の存在論が同時に実存論として展開されており、世界内存在としての現存在の存在構造に関する考察に、主体性の哲学を突破するような「共同性」の観点があるからである。

以上のような問題関心のもとで、著者は次の諸点を指摘する。すなわち、ハイデガーが「本来的自己」の開示について論じるのは、われわれが単に「周囲世界」に巻き込まれているのではなく、むしろわれわれが本来、世界を形成している存在であることを示すためであること、ハイデガーにとって本来の世界とは、現存在の存在なくしては存在しない超越の世界であること、本来的自己の了解は、そうした世界へと自己が超越しうること、およびその世界の地平で他者と出会うことを了解したうえで、他者との本来的な相互共存在の可能性を理解することであること。それゆえハイデガーにおいては、本来的自己は独我論に陥っているものではなく、自他の共同的相互関係を了解した本来的な相互共存在に参加しうる自己である、と著者は言う。

以上のような解釈を展開する手がかりとして、著者が注目するのは、ハイデガーが、他者に手本を示して他者を解放していく「率先・解放的顧慮」を挙げ、他者へのそのような顧慮を通した相互共存在としての人間関係の本来性を示唆している点である。ハイデガーの「率先・解放的顧慮」は、自立した存在へと、すなわち自分自身を取り戻した自己存在へと変様するよう他者をうながす概念であり、彼はこの自立した人間同士の関係を本来的な他者関係として見据えていると著者は言う。

以上のような構想の下で、著者は1920年代の講義および著作に着目し、ハイデガーの思索から他者問題を取り出しつつ、「世人」とは異なった、本来的自己による相互共存在の成立の方途を、以下の構成において論究する。

第1章「世界の日常性と本来性」では、「気遣い」における「実践」概念を取り上げ、ハイデガーの「周囲世界」を中心に、「実践」における行為のうちに現存在の実存論的優位が開示されること、また現存在が自分自身だけでなく、他者をも目的として扱う存在であることを明らかにする。

第2章「〈死〉と本来性の展開」では、『存在と時間』で展開される「死」の現象を考察し、「最も固有な可能性」としての「死」における単独の実存が、他者との本来的な相互共存在を視野に入れていることを論じるとともに、「死」と相互共存在の関係について論じる。

第3章「現存在と身体性」では、20年代のハイデガーにおいては表立って考察されていなかった「身体」に焦点を当て、人間が物体ではなく、有限的な身体的存在であるがゆえに、自他ともに有限的な現存在として扱うことが可能であることを明らかにする。

第4章「世界形成的な存在としての現存在」では、われわれが世界形成的な現存在（人間）であること、われわれが「気遣い」として世界の内に存在することが、自他相互が共同的に存在していくことだということを明らかにした。

第5章「自立性と相互性」では、「我－汝」関係とハイデガーにおける自他関係との相違を考察し、ハイデガーの他者論の現代的可能性を明らかにする。そして、ハイデガーの提示した、相互に自立した自己と他者の関係の可能性を、彼自身が十分には展開することのできなかつた他者関係の「相互性」の観点を踏まえて明らかにする。

第6章「共同性のゆくえ」では、これまでの論究に基づいて、現代における自立的な相互共存在がありうることを示す。

審査の結果の要旨

ハイデガーの存在論は、「本来性」の名のもとで単独的な自己を専ら主張しているとして批判されてきた。確かに、『存在と時間』では、ハイデガーは（現存在が世界内存在として他者と共に存在していることを論じているものの）本来性における自己の確立に論述の重点をおいており、本来的自己同士の相互共存在を十分に展開しているわけではない。

このような面を充分考慮に入れた上で、本論文は、現存在としての人間の存在に着目した1920年代の初期のハイデガーの諸講義および著作を詳細に検討し、ハイデガーの思索の中から共同性の思索の萌芽を探り出すとともに、死や、（あまり注目されてはいない）身体性等に関する論述を分析して、本来的な相互共存在の姿を再構成しようとしている。この意味で、本論文は、新たなハイデガー解釈の可能性を提示するものとして、高く評価することができよう。

本論文は他者問題をめぐるハイデガーへの批判を単に反批判するのではなく、レーヴィットの「二義的な相互性」という概念を、（ハイデガーの言う）本来的な相互共存在の再構成のモメントとして取り込むことで、ハイデガー他者論の現代的射程を論究するなど、斬新な論理展開を示している。

しかし本論文にも不備な点がないわけではない。すでに述べたように、本論文は相互共存在としての現存在の存在論を主としてハイデガーの1920年代の思索に基づいて論じているが、ハイデガーが存在それ自体の真理へと問いを進める30年代以降の思索については論じていないことが惜しまれる。今後はハイデガーの思索の全体像に迫る努力が求められる。

また、ハイデガーの思索における相互共存在の意味を考究する際、ハイデガーの自他関係に対する批判として、主としてドイツの哲学者——ブーバーなどの対話の哲学者や、ハイデガーが『存在と時間』を刊行した直後に、人間学的視点から彼へ批判をおこなったレーヴィット——のみを取り上げ、レヴィナス等のフランス圏の哲学者によるハイデガー批判に言及していない点も論述としては不十分の謗りを免れない。今後の視野の拡大が望まれる。

以上のような問題点があるとはいえ、著者の斬新な視点と広範な学識に基づく本論文は、新たなハイデガー解釈の試みとして十分に魅力的であり、今後この領域の研究者にとって一つの指針になることは疑い得ない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。